ホア ビン (平和)
HOA BINHレポート
JVPF 特定非営利活動法人 日本ベトナム平和友好連絡会議
NPO Japan Vietnam Peace and Friendship Promotion Council
〒162-0801 東京都新宿区山吹町316番地菊池ハイツ101 TEL 03-3268-4387 FAX 03-3268-6079
#101, Kikuchi Haitsu, Yamabuki-cho, Shinjuku-ku, Tokyo, Japan TEL(81)3-3268-4387/FAX(81)3-3268-6079
http://ifcc1985.com jvccpf@rmail.plala.or.jp
57号 2024年7月
会費／正会員：（個人）5,000円（団体）50,000円 口座名／特非）日本ベトナム平和友好連絡会議
◎郵便振替 00110−2−188872 ◎三菱UFJ銀行・江戸川橋支店（普通）1215225
◎ゆうちょ銀行・〇一九（ゼロイチキュウ）店（当座）188872

デイエンビエンフー抗仏戦勝70年（1954年）と南部解放50年（1975年）

平和と友好と連帯の活動へ

冷戦―対照的なベトナムとインドネシア

第2次世界大戦以前の東南アジア諸地域は西欧（イギリス、フランス、オランダ）の植民地であった。対米戦争を契機に日本は南進してこれらの地域を軍政下に置いた。敗戦した日本に代わって旧宗主国が再植民地化しようとした。戦火による荒廃した国土の政治を安定させるため、経済復興を早急に成し遂げる必要から植民地収奪が不可欠であった。これらの地域は日本の敗戦で民族独立＝共和国宣言をした。一方、東西冷戦構造は、東南アジアにも大きな影響を及ぼした。

インドネシアは民族主義者スカルノを大統領に独立したが、オランダはそれを認めず軍事介入した。1948 年9月オランダとの妥協的独立を認めない共産党の東ジャワのマディウン市での武装蜂起に対してスカルノは共和国の安定を最優先に考え鎮圧した。アメリカは反西欧のナショナリズムの高揚を抑えるために植民地支配を続けようとするオランダに圧力を加え独立を承認させた。

ベトナムでも独立宣言をしたが、フランスが軍隊を送り込み再植民地支配に乗り出してきた。アメリカは第1次インドシナ戦争でヨーロッパの冷戦構造の協力を得るためフランスに積極的に加担して軍事・経済援助を行った。フランスが敗北して軍事撤退を決めても平和は訪れず、アメリカは南ベトナム内戦への介入を正当化して第2次インドシナ戦争（ベトナム戦争）の当事者として直接ベトナム人民と対決することになり以来 20 年余にわたる悲惨な戦争が継続することになった。

ディエンビンフーの戦いとフランスの全面撤退

ベトナムの民族解放闘争（独立闘争）には幾つかの転回点があった。最初は 1941 年ベトナム独立同盟（ベトミン）創立である。ホーチミンの当面の最大目的は、ベトナム独立だった。ベトミン結成の基本方針の中にも「救国」を掲げた。フランスに代わって日本の軍事占領にベトミンは「日本とフランスを駆逐したら、ベトナム民主共和国を樹立」を決めていた。ホーチミンは農民工作に力を入れ幅広い統一戦線構築に力を注いだ。1944 年末からの「200 万人餓死事件」でベトミンは決定的なイニシァティブを握った。反

フランス軍の空挺部隊に抗したベトナム側の自転車輸送隊。動員された 2 万台の自転車によって、物資の 80%が輸送されたと言われる。

日感情の爆発と広範な反日運動が展開され民族救国組織、武装勢力を「ベトナム解放軍」に組織した。

日本の敗戦と同時にベトミンは総決起を指示し、9月2日ハノイでベトナム民主共和国独立宣言をした。一方、北緯 16 度線を境に南に英印軍、北に中国国民軍が日本軍の武装解除を分担して、情勢は複雑な様相になった。フランスは再武装してサイゴンを制圧し、英印軍はこれを支援した。ベトナム全土の再植民地化を狙い、フランスは増援部隊を派遣して、国民軍の撤退後に北部への侵攻を始めた。当初フランス軍の北進にベトミンは対抗できずに中国国境まで後退を余儀なくされた。フランスが占領地域を拡大するほど軍隊が分散化する矛盾が生じていた。ベトミンは敵の脆弱点に戦力を集中したゲリラ活動で解放区を広げ、戦いの主導権を握るようになった。南部ではカイライ政権（ベトナム国）を樹立してベトミンの弾圧と支配体制を強めた。⇒以下、7 頁囲みへ続く

【本号の内容】
・ディエンビンフー戦勝 70 年から南部解放 50 年-*1pと7P*
・2024 春訪問団報告/少数民族学生奨学金・枯葉剤被害者支援 -2-*5p*
・バクザン省で奨学金開始／JVPF 鹿児島- *6p*
・ディエンビンフーの地を訪ねて-*6p*
・JVPF17 回総会報告-*8p*
・掲示板／日越交流セミナーin かがわ、24 アンサンブルチャリテイー公演日程-*8p*

24 春友好訪問団報告ーハザン省、トゥエンクアン省でー
少数民族出身学生奨学金・枯葉剤被害者支援

2024 春友好訪問団は 1 月 27 日～2 月 1 日実施。主な任務を植林ボランテイアとし、継続している少数民族学生奨学金支援、枯葉剤被害者支援も併せて多忙なスケジュールの訪問団となった。

奨学金支援

ハザン省少数民族学校奨学金贈呈式

溝口　究（宮崎）

1月29日15時過ぎに、少数民族学校に到着した。会場の校庭には、生徒たちとそのご家族、学校関係者が待ち受けており、大きな拍手で迎えていただいた。

早速、3 曲ほど生徒による歓迎の踊りと先生（後で聞いたら音楽でなく数学の先生だった）による歌が披露された。この日のために、練習に励んだ様子が見て取れた。

司会者のあいさつに続いて、訪問団を代表して団長があいさつを行った。あいさつでは、歓迎への感謝と合わせて、日本の能登大地震に触れ、そこに住む子供たち、特に進学を控えた子供たちが厳しい状況に置かれているが頑張っていることなどを報告した。そして、皆さんも困難な状況に置かれる時があると思うが、くじけることなく希望を胸に頑張っていただくことを期待したいなどと話を行った。

この後に、各学年10名ずつ計40人に訪問団から奨学金やお土産の贈呈式を行った。

奨学生代表から、奨学金を大事に使う旨の丁寧なお礼の言葉があり、学校長からは、能登大地震があったにもかかわらず、訪問していただき感謝しているとのお礼の言葉があった。

贈呈式終了前の生徒と先生による踊りの際には、訪問団も踊りに加わることを促され、見よう見まねで踊りに加わり、交流を深めた。

贈呈式終了後に、訪問団の一員で書道をしている角山さんが漢字を書いてあげると、生徒と先生が押し寄せて、自分が好きな漢字を書いてもらっていた。もっとも多かったのは「孝」の字で、次に「福」や「財」の字が多かったように思う。

昨年に引き続き参加した宮崎県からの参加者は、自分が担当になっている奨学生と再会して、前年に撮った写真などを渡していた。

すべての行事が終了した後、訪問団参加者はサインを求める子供たちに取り囲まれ、サインに応じていた。名前が漢字であることが、珍しいようだった。

表面的にしかわからないと思うが、生徒たちはみんな明るく、楽しい学生生活を送っている様子だった。

奨学金支援　ハザン省少数民族学校で

来年も奨学金贈呈に

増實恒大（石川）

学生たちに拍手で迎えられながら、校庭のステージ正面の席に案内された。席に着くと、民族衣装を着た学生がお茶を入れてくれた。

式が始まった。最初は学生代表のスピーチだ。とても真剣な眼差しで話している。通訳がなく、何を話していたのかはわからなかったが、その姿からは学生らの感謝の気持ちがひしひしと感じることができた。スピーチが終わると曲が流れだす。歓迎のダンスが始まった。承和色に蝋梅、赤い鳥、青い海が描かれたアオザイをまとった学生らが、華麗なダンスを披露する。カラフルな扇を使ったパフォーマンスがとても印象に残った。次に男性が歌を披露。日本にはない曲調で新鮮な気持ちになった。その後も歓迎のダンスは続いた。歓迎がとても豪華で、少し驚いたとともに嬉しさが沸き上がった。

JVPF の代表として、溝口さんが歓迎の感謝と令和五年能登半島地震について述べる。その後、奨学金及び贈呈品を学生らに手渡し。もらった学生全員が笑顔でとても喜んでいる様子で、中には泣いて喜ぶ学生もいた。この様子を見て、私たちも渡してよかったと思うことができた。そして、奨学生らとの記念写真。学生たちはもらった品を前に掲げ、カメラにその嬉しさを伝えるように笑顔で写真を撮っていた。

その後、書道をその場で書いてプレゼントする企画を実施。書くのは角山さん。角山さんの書く字は力強い字で、

ヴイスエン郡少数民族寄宿学校で、40 人の奨学生と訪問団 (2024/1/29)

学生及び教師までもがその字に目を光らせていた。もらった人たちは嬉しさのあまり、笑顔と声が漏れ出ていた。そして、その漢字を周りの人に見せびらかし自慢していた。人気がありすぎて、角山さんの前には長蛇の列ができていた。時間の都合上、並んだ全員には書けなかったが、多くの学生に喜んでもらえたと思う。

最後は学生と一緒に踊りを踊った。振りがわからないため、見よう見まねで踊る。うまく踊ることができなかったが、とても楽しかった。言葉が通じなくても、笑顔で目と目を合わせて手を繋いで踊っているだけで、意思疎通ができたような気がする。

式が終わり、私たちがバスに乗り込もうと向かっていると、たくさんの学生に写真とサインを求められた。みんな日本人が好きなのか、とてもフレンドリーに接してくれた。言葉はわからないが、気持ちはとても伝わってきた。バスに乗り込む最後の最後までついてきて手を振ってくれた。少数民族の子供は人懐っこいと聞いていたが、まさにその通りだった。

実際に行き手渡しをすると、この学生たちの力になれているということを実感することができた。来年も渡しに行きたいと思えた。

奨学金支援

一期生と４年ぶりの再会

宮﨑勇雄（福井）

「Nga」と呼ぶのと同時だった。お互いの手を握りしめ「会いたかった」と本心から思わずにいられなかった。Nga とて大学の日本語学科 1 年生で、2 カ月の勉強で何となく判断できて心から嬉しかった。

2024春ベトナム友好の旅は最終日で、ハノイ市内見学を断念し宿泊ホテルのロビーで Nga さんと 4 年ぶりに会えた。この陰には彼女からメッセージやJVPFの並々ならぬ計らいがあったと思い特に感謝している。

2016年に始まる少数民族寄宿中学校の第1期生で、私は Nga ちゃんの奨学金支援に充てられた。11歳の中学生では食べ盛り伸び盛りと、親元を離れた寄宿生活は困難を極めたであろうと想像できる。私は2年毎にハザン省を訪ねて、彼女の成長ぶりを見守った。特に、2020年は中学生活から進学を

迎える時期で「立派に卒業したから次は高校だね」と、何度も私に挨拶に来る彼女を最後にコロナ禍が蔓延してしまう。

2020年の訪越雑感で『1 月の田植え』と題し、ハザン省少数民族寄宿中学校をＨＯＡ　ＢＩＮＨレポートに掲載されたが、その折も「何らかの継続支援を」と心の中に幾度も思い手紙の交換を重ねた。そんな経過のなか訪越の機会を失い、マスク経済社会による４年間が空白となる。

だが、2023年５月急性心筋梗塞に倒れ、平常生活に戻る半年を要し今回の訪越になるのだが、サポート役を孫の増実（大学３年生）に依頼した。訪越直前にはＪＶＰＦ を通じて Nga ちゃんから会いたいとのメッセージがあり。こうしたタイミングで、嬉しいことに4年ぶりの再会となった。

が私の記憶は中学生の Nga ちゃんで、ピンクのアオザイ姿の彼女を見た瞬間、少女の成長ぶりに先ず驚くのである。あどけない雰囲気の中学生と違って立派な一人の女性で、可憐さが残る反面に希望に溢れる何かが伺えるのである。

困った時にと隣室のルオンさんを頼るまでもなく、孫の増実は次々とスマートフォンを駆使してNgaさんの通訳に活躍した。彼女は「私は日本語学科で後３年半勉強するから」と力強く語り、将来への思いを馳せた楽しみな会話が続いた。ハザン省から都会に出たばかりで大学周辺しか知らない、と言うので私がハノイ市内を案内することになった。

私のホテルはハノイ中心部に近く、ホアンキェム湖からオペラハウスまで手を繋ぎ歩いた、コーヒーを飲んだりピクニック気分が続く。最後の別れ際に彼女「大学を卒業したら日本へ行きたい」と、紅潮した面持ちの仕草がとても愛らしい19歳の乙女になっていた。

記：2024 年３月末日

奨学金支援

ヴィスエン郡公立中学校で少数民族学生支援開始

上：ヴィスエン郡公立中学校での「奨学金贈呈模様」
左：式の始まりで歓迎の民族楽器演奏

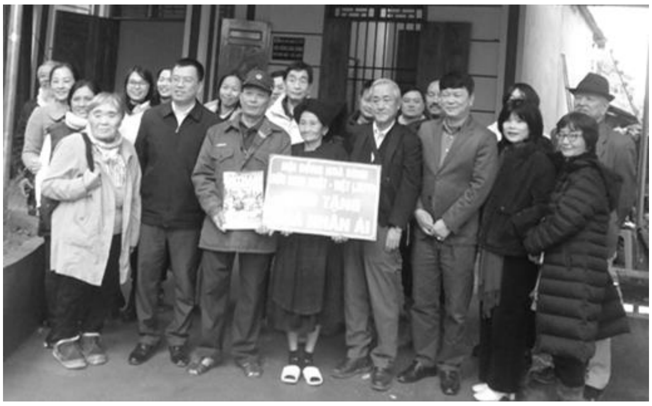
ハザン省ヴィスエン郡立中学校で少数民族出身の貧困学生報奨金事業が新規に開始され、1 月 29 日、贈呈式が行われました。これは「未来を築く教育基金」が JVPF に委託し、学年５人×4 学年×2,000,000 ドンの５か年計画で始まったもの。2027 年度（2027 年９月～）まで続けられる。

枯葉剤被害者支援　ハザン省

完成した「仁愛の家」を慰問

枯葉剤被害者支援のための「ベトナム民族アンサンブルチャリテイーコンサート 2023」及び「連合・愛のカンパ」助成を受けた被害者の調査慰問と「仁愛の家」寄贈が実施され、1月28日、ハザン省で寄贈された仁愛の家の調査・慰問が実施されました。

昨年訪問し資金寄贈した家族の家が立派に完成していました。



枯葉剤被害者支援　トゥエンクアン省

トゥエンクアン省枯葉剤被害状況調査

角山　優子(新潟)

1月30日午後、トゥエンクアン省 VAVA を訪問し省内の枯葉剤被害者の状況について、お話を伺いました。

ベトナム側の出席者は、トゥエンクアン省の枯葉剤被害者協会、友好委員会、外務局など予想よりも参加が多かったです。ハザン省からの連絡を入れてもらったからかと思われました。

≪被害者の現状についてのお話の主な内容≫

・トゥエンクアン省は面積が 58,000 平方メートルでその70 パーセントが山林、山間地です。人口は 80,000 人以上で、20 の民族がいます。1 市、6 郡、180 村で構成。

ベトナム戦争から約 50 年ですが、現在省内には約3,000 人の被害者が暮らしています。その内直接戦争に参加した人が約 2,000 人、その他は第 2、第 3、第4世代です。

・国、省としても面倒は見ているが、亡くなった人もいるし、生きている人も病気になっています。がんとか、体が不自由になっているとかいろいろな障害があります。

例えば、ある家族では 2 人の子供がいて 2 人とも病気、

トゥエンクアン省 VAVA との会談には友好委員会、外務局関係者も同席された。

また 4 人いても 4 人とも障害が出ています。家族に障害が出ると、本人はもちろん、その介護のため家族も働きに出られず、貧困家庭になります。

1995 年から今までに、1,000 人くらい被害者が亡くなりました。2022 年には 500 人、2023 年には 200 人が亡くなりました。

現在、約 4,000 人が被害者認定の自己申告をしてきていますが、承認されていません。

・VAVA から被害者への見舞いには国からも補助があります。また被害者をVAVAでも雇用しています。裕福な人もボランティアで助けてくれます。被害者の住んでいる郡とか村にもVAVAがあって支援活動しています。

VAVA の活動は 政府とか支援事業と被害者の橋渡しです。もし貧乏な家族があれば支援します。正月とか 8 月とかに訪問します。しかし困難なことも沢山あります。被害者の家族は大変貧乏です。住宅に困っておりテントのような住まいもあります。しかし被害者が多すぎて全部の面倒が見きれていません。病気はどんどん進行しており、みんなが病院にかかれるように世界中に支援を呼びかけています。日本からも協力をお願いします。

≪最後に訪問団側から質問≫

・「この省にリハビリセンターはあるか？」

⇒あります。2016 年にリハビリをする病院ができた。

・「枯葉剤が原因と思われるがんとかの治療法の研究は進んでいるか？」

⇒枯葉剤が原因とみられる病気は17種類でそのうち 9 種類ががん。治療法は進んでいない。ドイツからの援助でできた病院もあるが、20人～30人しか入院できていない。

・「第5世代に枯葉剤の被害者が出る可能性はあるか？」

⇒ある。

最後に外務局局長と友好委員会会長から今回初めての私たちの訪問に対して感謝の挨拶があり、有意義な訪問となりました。

枯葉剤被害者支援　トゥエンクアン省調査慰問１軒目

できることを、少しずつ続けていきたい

岩永　環(宮崎)

≪レポート≫

訪問日 2024年1月30日(火) トゥエンクアン市

・グエン・フー・ダイさん：1947年生まれ(76 歳)枯葉剤被害者(戦争参加)。戦場は中部のベトナム・ラオス国境で 1966 年 9 月～1976 年 6 月 11 年間、従軍、ベトナムの解放統一後も軍人として働く。1973 年ラオス在住中に結婚 1976 年帰国し、自由労働(日雇い)で生活。

右からダイさん、母親、次男。次男の障害が重度。

・家族構成と状況：6 人。妻は死亡。本人(被害者認定されている。症状は、出ていない)、長男(精神不安定の病

気)・長男の配偶者(仕事をしている)・子ども(孫2人 11 歳・14 歳 症状はでていない)、次男死亡(肺・肝臓の病気)、三男 脳の病気・神経・てんかん。

・公的援助:政府から本人は、月 160 万ドン援助、長男は病気だが認定されていない(17 種類の認定項目に入っていないため)、三男は、月 120 万ドン援助。家族 6 人の生活費政府援助 280 万ドンと長男の配偶者の収入が 100 万ドン程度で月 380 万ドン程度の生活費。

・訪問当日にダイさんの母親が来られる。母親は、農家で労働奉仕隊になっていた。現在も膝には、爆弾の破片が入っているとのこと。

≪知らなかった戦争の事実≫

・2022 年に宮崎県(東臼杵郡門川町)で開催された「ベトナムアンサンブル・チャリィティーコンサート」に参加しパンフレットの中の『わたしの体の中では戦争は、終わっていない』という言葉が飛び込んできました。そして、枯葉剤の被害は、3世代にも4世代にも続いていること、ベトナム戦争で使われた枯葉剤が日本でつくられていたこと、などを知りました。断片的な情報しか持っていなかった自分がとても恥ずかしかったことを覚えています。

今回のツアーに参加することで「全く知らなかった戦争の事実、今も続いている被害の現実」「私の仕事とかかわりのある少数民族の方のことを自分で参加して知りたい・・」という思いで参加させていただきました。

・被害者のダイさんの家族の収入がベトナムの生活水準の中でどの位置なのかは、わかりませんが、お宅の生活環境を拝見するとかなり厳しい状況のようでした。

私は、訪問時のダイさんやダイさんのお母さんの支援に対する期待の大きさを感じ、自分にこれから何が、どこまで、、いつまで、できるのだろうか、と思うと同時に知らなかったことに対して衝撃が大きすぎ帰国して 1 ケ月ほどは、気持ちが混乱して整理をつけることができませんでした。

・私が今までに出会った方の中にも広島で2歳で被爆し、今も健康を気づかいながら生活をされていらっしゃる方がいらっしゃいます。「健康で生きている」ことだけを気遣いながら生きていく、その方のご苦労も私には、想像もつきませんでしたが、生活自体が不安定で厳しい状況の今回の被害者の方にお会いして、「ベトナム戦争は、終わっていない」という現実をつきつけられました。

・延岡に帰ってきてベトナム戦争の被害が続いている現実を話していると「(散布後の」ベトナム(の食べ物)は、今は大丈夫なんですか？」という質問を受けました。戦争で使われた枯葉剤が日本の山林に埋められているということについても、そういう現実があるということを伝えるだけでは済まされないように感じます。新たな差別や偏見を生まないために現実を知り、学ばないといけない、と思うと、今回のツアーの現実を伝えること、支援の必要性を伝える難しさを感じてしまいます。

・時間が過ぎ、宮崎の方達と話をしていく中で「自分なりに、できるところで、できることを、少しずつ続けていくしかないのだ」と考えたところです。悩みは、続きそうですが、、、。

最後になりましたが、この活動を続けてこられたみなさんに敬意と感謝の気持ちでいっぱいでした。今まで、何もしていなかった私をこのツアーに参加させていただき、貴重な経験の場に同席させていただいたことに感謝をいたします。ありがとうございました。

枯葉剤被害者支援　トゥエンクアン省調査慰問２軒目

～親亡き後にも続く不安～

阿部　洋子(宮埼)

・1947 年生(76 才) 男性 グエン・バイ・ホイさん(トゥエンクァン省市内在住。妻(1958 年生 65 才)、二女(1987 年生 36 才)との 3 人暮らし(長女は結婚し、夫と 3 人の子どもと別に暮らしている)。

・1971 年(24 才)～1976 年(29 才)までの 5 年間、クアンチのジョンソンで軍用車の運転手として従軍。1976 年に退軍し、その後 2003 年に定年するまで運送会社に勤務。1983 年に結婚し、1985 年に長女、1987 年に二女が誕生。

・ホイさんの企業年金月 430 万ドンと、次女への枯葉剤被害者への補償金月 260 万ドンを合わせて月 700 万ドンの収入があり、月 100 万ドンの借家に居住している。

ホイさんには「今のところ」枯葉剤被害の影響は見られないが、二女は出生時から肢体、知的に障害があり全介助の状態だったとのこと。ホイさんと妻の二人で二女の生活すべての世話をしている。普段はほとんどの時間をベットに横になって過ごしており、時々声を出すことはあるが言葉にはならない。

訪問時、二女は VAVA からの支援品だという車椅子に座っていたが、短時間の座位も苦しそうに見えた。また、家の入口から生活スペースまでは高い段差もあり車椅子が活用出来ているのか支援内容について疑問も持った。

二女は、1995 年にトゥエンクアン省で初めて枯葉剤の影響による被害者と認定されたため、二女の医療費は国が全額負担している。認定された時の気持ちを聞かれて、ホイさんは「仕方がない。責任をもって育てるだけだと思った。」と話していた。

移動する時は妻が二女を抱きかかえていたが、36 年間の毎日の暮らしを思うと言葉がなかった。妻はどんな気持ちで世話をしてきたのだろうか、気持ちを休ませる時間があったのか、ホイさんは・・・、長女は・・・。

障害者やその家族にとって、親なき後の生活に対する不安は経済的な物だけでなく精神的にもとても大きいと思う。少しでも安心して暮らせる社会であってほしいと思う。

・結婚した長女の 3 人の子ども達には「今のところ」枯葉剤被害の影響は見られず元気に生活しているが、常に不

安は抱えているとのこと。「今のところ」と何度も聞かされた。枯葉剤被害の影響はどこまで続いてしまうのかと改めてベトナム戦争の悲惨さを思い知らされた。

鹿児島 JVPF　2024バクザン奨学金支援訪問団

バクザン省で少数民族学生奨学金を毎年 20 人へ

前田　秀一（鹿児島）

JVPF 鹿児島は、今年 3 月、支部総会を開催し、これまでの取り組みを踏まえて、今年から新たに「バクザン省少数民族中学生奨学金支援」を向こう 5 年間取り組むことを確認、20 人のサポーターを募りながら、支援体制を確立し、いただいた支援金を直接お届けするために3人が代表して現地中学校を訪問しました。

21 日福岡空港発の国際線でハノイ空港へ、さっそく、ハノイから車で約 1 時間ほどのベトナム北部のバクザン省友好委員会事務所を訪問しました。今回の少数民族奨学金支援にあたってベトナム中央友好委員会がバクザン省を提案、バクザン省の友好委員会として受入れいただいた事への表敬訪問でした。

翌 22 日、支援先のバクザン省リュックナム地区リュクソン中等学校を訪問。ベトナムの学校制度では小学が 5 年、中学が 4 年制となっているそうです。私たちが訪れた時、全校生徒が校庭に集まり歓迎の踊り（民族衣装を纏ったもので）で迎えてくれました。下はまだ幼い子供らしい1年生から、大人より背の高い人もいる４年生までの生徒が集まった中、女性の教頭先生の司会進行でセレモニーが始まりました。校長先生の歓迎と感謝の挨拶に引き続き、川路団長から生徒たちへの熱い思いを伝え、鹿児島から同行した残りのメンバーもそれぞれに思いを伝えました。その後、中学校が選抜した 20 名の皆さんに登壇いただき、訪問団から直接支援奨学金と記念品（ボールペン他）を添えて贈呈式を行いました。受賞者を代表して生徒代表が御礼の言葉を述べ、授賞式は終了しました。

校長先生の感謝のあいさつでは、奨学金は「生徒たちが自らの境遇を克服し、勉学に励み、祖国と社会のために役立つ人材となるよう動機づけるもの」という話がありましたし、受領した生徒からは、お礼とともに「私たちは、常に勉強の向上に努め、品行方正な生徒になることを約束します」「より一層、家族、親戚、そして社会によりよい生活と未来を築くよう努力します」という挨拶を頂きました。

ベトナムのとりわけ少数民族は相対的に貧困度が高く、就学環境も不十分だと言われています。今回の活動は、貧困度合いが高く成績が優秀な少数民族出身学生を対象に奨学支援を行い学生の向上を促し、ベトナムの将来の平和と発展、日越友好に寄与していただくための草の根の活動としての意義を持つものと確信していますし、今回の訪問を通じて、直接子供たちの耀くような眼を目の当たりにして、その意義を強く確信しました。

鹿児島 JVPF　2024バクザン奨学金支援訪問団

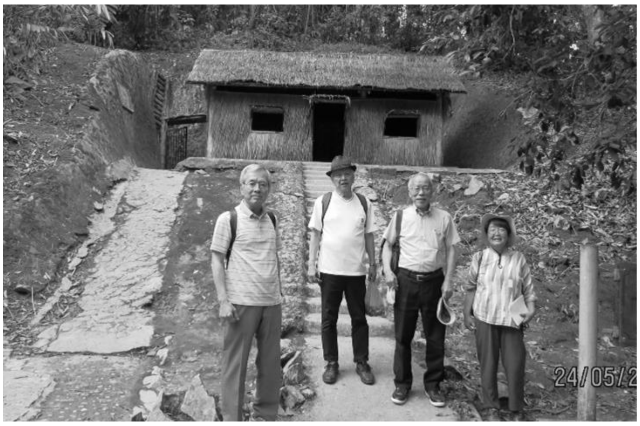
戦勝 70 年のディエンビエンフーの地を訪ねて

松永三重子（鹿児島）

第一次インドシナ戦争（1953 年 11 月～1954 年 5 月）、ベトナム訪問 3 日目、午前中ハノイでホーチミン廟を見学した後、飛行機で西北部へ 1 時間、ラオスと国境を接する盆地　ディエンビエンフー空港に降り立ちました。ここは、1945 年日本軍が撤退した後、元の支配者だったフランス軍が失地回復を狙って陣地を築いた地です。56 日に及ぶ闘いはベトミン軍（ベトナム民主共和国人民軍）の勝利で終わりました。第一次インドシナ戦争と呼ばれています。

飛行場から見渡すと、ぐるりと山々が取り囲んでいます。私たちはまず、飛行場の近くのフランス軍司令部跡を見学しました。隣接する記念館では、戦争の記憶を後世にとどめるために、建物の内側にぐるりと円形に闘いの様子が描かれていました。200 人の画家が 9 年がかりで、3,225mの画布に 4,500 人以上を書き込んだそうです。

上：血みどろの激戦地となった A1 の丘で
下：デイエンビエンフー盆地を見下ろす山中にあるベトナム人民軍の秘密司令部跡で



闘いの当初、ド・カストリ率いる近代的なフランス軍は日本軍の飛行場を活用し、パラシュートで人や物を投下。短期間に勝利する目論見だったのでしょう。司令部跡から歩いて15分ほどの地点にフランス軍が最後まで立てこもったAIの丘があり、当時を彷彿とさせる壕や砦(幾重もの鉄条網)などを見学しました。

翌日はベトミン軍要塞跡の散策でした。車で少数民族の住む山間の村を1時間、段々高度が上がって行きます。霧の中に垣間見える山の起伏の棚田や、高床式の民家、民族衣装で働いている人にも会いました。

車を置いていよいよ山の中に入ります。どんどん上がって行き、また、降りる。小川を渡り、しばらく歩くとベトミン最高司令部が会議(ホーチミンやグエンザップ将軍など)をした小屋など、様々な小屋が点在。最後に見たのは、300人分の煮炊きをしていたという小屋でした。どの小屋の屋根も壁も、そして炊事場のかまども、現地で調達したらしい竹やヤシの葉(?)萱、土です。火を使う時はまず、屋根に水を掛けて煙が立たないように工夫していたとのこと。

通訳の方の「今、歩いている道は当時はな　かったんですよ。」の一言に、安全な道、草木も整理され空も見える所を歩いていることに気づかされました。

前日、記念館で観た膨大な絵では、人の高さほどに掘られた壕がくねくねと続き、そこを牛や自転車(2万台)に食料を積み、豚を引き、民族衣装や軍服の男女が進むさまが描かれていました。アコーディオンを弾く兵士も。旧日本軍から奪った武器も解体して人力で運んだそうです。フランス軍には予測できない、人々のふんばりだったのです。

今年は戦勝70年、勝利のこの後、ジュネーブ協定で第一次インドシナ戦争は終結しますが、これで平和が訪れたわけではありません。

⇒1頁から続く

ディエンビエンフー抗仏戦勝70年(1954年)と南部解放50年(1975年)

冷戦―対照的なベトナムとインドネシア／1頁目掲載

ディエンビンフーの戦いとフランスの全面撤退／1頁目掲載から続き

米国はフランスの要請を受けてインドシナへの軍事援助、米軍事使節団を派遣して本格的に介入し始めた。守勢に回っているフランスはラオス国境に近い山岳地帯のディエンビエンフーに塹壕要塞を築き、ベトミン正規軍をおびき寄せ壊滅しようとした。ベトミンはディエンビエンフーの攻撃を決定して、フランス軍の分散化を図るゲリラ活動と調整してディエンビエンフーを塹壕包囲して、敵戦力を一つ一つ無力化させ1954年5月7日フランス軍は降伏した。フランス軍の精鋭部隊が米国の援助を受けならベトミンに敗北した。フランスの失地回復は不可能だった。休戦に向けたジュネーブ会議で①ベトナムを北緯17度線を暫定軍事境界線として南北に分割する、②南北統一政府を樹立するための総選挙を1956年までに実施することを柱とする休戦協定が決まり、関係国が調印した。しかし、米国、ベトナム国は調印に参加せず、新たな対決が始まった。

米軍の直接介入と南部解放50年

ベトナム労働党は、荒廃した北部の経済建設で南部開放の拠点づくりと平和統一に期待を抱いていた。南部では政治闘争が主流で武力闘争はあくまでも政治闘争を支えるゲリラ闘争で、軍事攻勢をかけることは認められていなかった。だが、米国、ベトナム国がジュネーブ協定に調印しなかったことで、休戦協定は拘束力をもつことはなかった。ベトナム統一のための総選挙は行われなかった、南ベトナムへ介入してきた米国が共産勢力との対決を強めた、米国の軍事・経済援助を受けているカイライ政権が批判者たちへの弾圧を強めベトミン勢力が壊滅的状態に陥ったことで、①南部を武力解放する。②南部開放のために民族統一戦線を樹立する。武力闘争と政治闘争を並行的に進める重要な決定がされた。

1960年12月「南ベトナム解放民族戦線」(ベトコン)が結成された。宣言は「米国とジエムの支配を打倒し、国を救うため、国内のあらゆる階層が団結して立ちあがり、戦おう」と14年前にホーチミンがアピールした「救国民族統一戦線」の発想を発展させたものであり、南ベトナム農民、学生、企業家、知識人階層の支持を受け、大衆組織として発展した。

米国の南ベトナムへの介入はアイゼンハウワ―時代から軍事顧問を送り、ケネディ時代にゴ・ディン・ジエム政権転覆を実行し、米軍派兵の分岐点になった。ジョンソンはトンキン湾事件をでっちあげ、北爆決定、地上戦闘へ介入してベトナム戦争を「アメリカの戦争」へとエスカレーションさせた。正規の戦闘訓練しか受けていない米軍は、ゲリラ活動に困惑し、作戦はベトコンに筒抜けで作戦が空転してパニック状態になった。理性を失ったのか、村に突入して家や稲穂を焼き払い、村民を強制移住させた。枯葉剤を大量に散布して、緑豊かなジャングルは丸裸になった。土地を奪われ、家を焼かれ、幼い子どもを爆撃で傷付けられたベトナム人は激しい反米感情が燃え上がった。1968年1月30日北・解放戦線はサイゴンを始め40都市で一斉攻撃を行った。このテト攻勢は、政治的・心理的に米国民にインパクトを与えた。「泥沼の戦争」に疑問と批判が高まり、米大統領は撤退を模索し始めた。和平と戦争が同時並行的に進んだ。1969年6月南ベトナム共和国臨時革命政府が樹立された。

1973年1月パリでベトナム和平協定が調印された。南の合法政権の曖昧さを残したため、3月米軍が撤退を完了したが、協定は無視されベトナム人同士の新しい戦争が始まった。サイゴン軍は占領地を確保するためその地に留まり防衛の任務を負うが、北・解放戦線は機動的に敵の弱点に戦力を集中して陥落させ、解放地域を拡大した。守勢に追い込まれたサイゴン軍は自壊していった。最後まで権力維持にこだわったサイゴン政府に1975年4月総攻撃作戦を開始して、4月30日サイゴンに入場、ミン大統領は無条件降伏、ベトナム共和国は消滅。南部が解放された。

ディエンビンフーも食料や弾薬の輸送がなければ戦い続けることができなかった。最強の帝国主義国アメリカを相手に勝利できたのもベトナム人民の支援であり「人民の戦争・人民の軍隊」の戦いであったからだ。　(田中秀樹)

JVPF第17回 通常総会報告

5月18日(土)東京でJVPF第17回通常総会が開催されました。福井・新潟など東京以外からも会員が参加されました。各地や会員個人のベトナムとの関わり・活動を中心に報告します。

宝田理事長を総会議長に選び村山会長が高齢のため上京できないので、山下副会長が代わって会長挨拶を行いました。

議案審議では第1号議案の「さいたまJVPF『仁愛の家』寄贈活動の……牛2頭寄贈」が話題になりました。平松さんは歴史的な寒冷が襲い、放牧していた牛やヤギが絶滅した折に「仁愛の家」寄贈でベトナムを訪れ「『何が欲しいですか』と尋ねると『雌の牛が欲しい』と言うのです。雌牛に子供を産ませて、売って現金収入で生活費に充てるのです。それで生活もだいぶ楽になっています。最終的に家52軒と牛12頭を寄贈しました」と牛寄贈の経緯を語ってくれました。全ての議案を満場一致承認した後、「懇親会」で自己紹介と活動が報告されました。

「昨年鹿児島の方と一緒にベトナムを訪問しました。良い方ばかりで楽しかったです。来年計画があれば参加したい」(新潟)「昨年急性心筋梗塞で倒れ体調は戻りつつありますが、万が一を考え娘と参加しました。4年ぶりにハザン省の奨学金支援した子供に会ったら大学生になって日本語専攻で勉強していました。卒業後は日本に行きたい希望を聞きました」(福井)「今年のアンサンブルは頑張って2か所で開催します。会場も確定しました」(埼玉)「ランドセル・文房具を届ける活動をしています。皆様がベトナムに行く機会がありましたら、お声掛けください」(JIYU)「今年は2年ぶりにアンサンブルを開催します。1972 年に相模原補給廠で修理した米軍戦車の輸送阻止の闘いがありました。それを記録した『戦車闘争』『続　戦車闘争』の上映会や写真展を今年は本格的にやる思いです」(神奈川)「『希望の村』支援を続け 30 年位になります。『希望の村』からの留学生が結婚・子育て世代になっていて、その支援活動もするようになりました」(ふぇみん)「昨年から『ハガキ平和アート』を未就学から高校生まで平和に関する図画・メッセージ・詩を全国に募集しています。地元文京区内の小中学生全員にチラシ配布を行います」(東京)「労働者・留学生も一時に比べて日本は人気がなくなっています。足もとの経済はズタズタで、円安もありだいぶ変わってきているのでは」(事務局長)「コンサートを私の所属しているロータリーの協力を得て資金づくりをしています。皆さんもロータリーの人を巻き込んで資金などを集めて下さい」(副会長)「4月に在日ベトナム大使に来てもらい知事への表敬訪問、セミナー・懇親会をしました。企業やライオンズクラブの方に来てもらい、秋のコンサートに協力してくれることになりました。広がりをつくりたいと思います」(理事長)「植林事業は緑化と言うより少数民族の生活を向上させるため八角、ナツメなど換金植物を植林する目的です」(副理事長)と様々な活動が報告されました。

・2024年度事業計画
【組織活動】——略
【事業】
1、教育支援事業(1)—少数民族出身学生奨学金支援
①ハザン省ウィスエン郡少数民族学生寄宿学校での奨学金支援。2024 年度は六期生(中4)10 人、七期生(高3)10 人、八期生(高2)10 人の都合 30 人。
②ウイスエン郡公立中学校での 2024 年度の少数民族学生奨学金支援は 20 人(各学年5人)の予定。
③ハクザン省のリュックソン中等学校での 2024 年度の奨学金支援活動は 2025 年5月に計画。
2、教育支援事業(2)—村山記念 JVPF 日本語学校
常設教室を整えた学校再開へ努力していく。
3、国際協力事業(1)—枯葉剤被害者支援のための活動
①枯葉剤被害者貧困家庭支援「仁愛の家」寄贈活動を今年も継続していく。この基金として連合・愛のカンパの助成を受ける。
②被害者の調査・訪問活動を続ける。
4、国際協力事業(2)—ベトナム民族アンサンブルチャリティーコンサート
西日本を中心として開催していく。
5、国際交流事業(1)—日本語及び日本研修／略
6、国際交流事業(2)—文化・スポーツ交流／略
7、目的のための必要事業—日越友好植林事業
ハザン省で実施しているプロジェクト最終期となる三期目を申請していく。
8. その他の事業—会員及び企業の事業及び事業展開への「情報提供の事業」／略

掲示板

・さる4月15日「**日越交流セミナーin かがわ**」が香川県高松市で開催された。香川ベトナム平和友好連絡会議(KVPF)が主催し2019年12月以来、2回目となる。今回は駐日ベトナム社会主義共和国大使館ファム・クアン・ヒエウ大使の記念講演も行われた。

・24 **ベトナムアンサンブルチャリティー公演**日程固まる。
10月11日(金)福岡市／西部ガスホール
10月12日(土)鹿児島・志布志市／市文化会館ホール
10月14日(月)宮崎・延岡市／野口遵記念館ホール
10月15日(火)大分市／明日香学園ホール
10月16日(水)広島・福山市／県民文化センターふくやま
10月17日(木)香川・さぬき市／源内音楽ホール
10月20日(日)愛知・知多市／勤労文化会館やまももホール
10月22日(火)埼玉・吉川市／市民交流センターホール
10月23日(水)神奈川・相模原市／南市民ホール
10月24日(木)埼玉・川越市／ウエスタ川越小ホール